

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）

第42巻第2号 二〇〇六年十一月

《翻 訳》

アルフレート・デーブリン著・岸本雅之訳

『ポーランド旅行』 「クラクフ」

祈りを捧げる人々の頭上の、木の十字架にかけられて、処刑されて亡くなった人の、圧倒的な実在に私は思いを致した。

私が感じているものよりも、路面電車の方がより現実的だというわけではない。

ほの暗い、地下室のような入り口に、ロウソクが点っている。聖堂中央部には、日光が眩しい束となって、上の高いところから右下へ、会衆席越しに、柱に沿って、石の床に射している。身廊は重々しく荘嚴にそびえ立ち、鋭角をつくって上方で閉じている。その青地の天井には、小さな金色の星があしらわれている。そして、祭壇の入り口上方に、十字架のキリスト像。巨大なもので、天井にぶら下がっている。両腕を広げ、天井から吊り下げられているのだ。その亡骸は、十字架によって縦と横の線が強調されている。生きている人々、祈る人々の頭上で、深い多色のステンドグラスを背にした、処刑されて亡くなったキリスト。

亡き人キリストには、既に他の都市でも出会っていたが、マリア像に氣を取られて見過ごしていた。ここで彼を見ているうちに、私ははっとする。敬虔な人々が木製の会衆席の間を通って前方へ進み、柱のそばでひざまずいている。私の後ろでは買い物籠をもった女性たちが幾重にも列を作っている。不意に、私には彼らが皆、不可解な未知の、驚嘆すべきものになったのだ。中央祭壇や小祭壇のあたりを教会の用務員たちが小走りに動き回り、膝をかがめては移ってゆき、たくさんのロウソクに点灯している。燃えてゆらめくロウソクの赤い清浄な火は、太陽の白い粗暴な火炎を前に、しっかりと点っている。

この世には苦悩がある。人間的動物的な苦悶、苦痛がある。それがあの上の亡き人キリストだ。その傷。処刑。刺し貫かれた手足。彼からは恐怖がにじみ出ている。彼に人々は祈りを捧げているのだ。円柱や柱や豊かな色彩ではなく、彼に祈っているのだ。それらはただ彼のために集められたものにすぎない。日常的な光景だが、私には何とも奇異に感じられる。これらの人々の表情はどうだろう。彼らも私のように感じているのだろうか。胸の中から石のような心を取りのぞき、心に血がかよえば、見ることができなのだ。眼で見えるのではない。この世には、苦痛、悲嘆がある。それは恐ろしいけれど、光明を与えてくれる感覚であり感情なのだ。恐ろしいことだが、このこ

とは教会のいたるところに記され、誰でも読むことができる公然の秘密だ。それに堪えるために、人々は豊かな色彩と美で飾り立てるのだ。

私は足音をしのばせて歩を進める。大きな王冠型天蓋のある小祭壇のそばを通り過ぎようとすると、そのなかで、聖職者が一人の男に洗礼を授けている。薄暗がりの中で、身じろぎひとつせず、ひざまずいたままの人たち。格子扉のついた付属礼拝堂。彫像のある墓碑。側廊には方形旗。相変わらず、乳白色の日光が射し込んでいる。石柱の下の方に、古めかしい絵画がかかっている。ときおり太陽がかげろ。教会はそのたびに、沈んでは活気づく。

外へ出る。教会の周りは、衝突よけの白い石に囲まれている。それらは、ひざまずいてお辞儀をしている祭服姿の僧侶たちが、長く連なっているかのようだ。入り口に物乞いたちが群がっている。眼窩が落ち窪んだ若い盲人。痘痕のある盲人。ぼろの分厚いスカートをまとった二人の中年女性はいわだらけで、てかてかの赤ら顔をしており、右の前腕を曲げた状態で、手を開いている。そのようにして彼らは立ち、そして、立ち続ける。非常に高い窓と古い外壁をもつこの教会は、市場広場に建っており、二つの塔を持っている。左の塔は、高いところに、教会の模型のような小さな構築物がついており、その上の尖端近くには、金色の王冠がかかっていて、遠くへ輝きを放っている。その上空を飛行機が音を立てて飛んでゆく。王冠をいただいたポーランドの女王マリア。これは彼女に捧げられた教会だ。時計が十二時を打つ。鐘が低く鳴る。ラッパが鳴り響くが、鐘の音にかき消される。

朝、ふたたびそこを訪れる。広い教会の内部全体が暗い。柱のところに何本かロウソクが揺らめいている。前方の両側にある小祭壇には、灯明が点されている。次第に見えてきたのだが、教会の床は、ひざまずいた人々の黒い姿でうめつくされている。パイプオルガンが鳴る。その響きは、建物の中の一本の柱、一枚の絵画と同じようにさ

さやかだ。姿は見えないが、低い声で、司祭が歌を歌っている。それから、静寂。ベルが鳴る。短い間隔をおいて、高らかに鳴り響く。白い、ごくゆつたりとした式服の若い司祭が、前方を祭壇から祭壇へ移動してゆく。ベルは鳴り続ける。司祭は何かを持っていて、階段を上がっては、それを上に置いている。ベルが鳴り続けるなか、彼は厳かに、ゆつくりと、ふたたび階段を下りて、小祭壇の正面に立ち、軽く、すばやく、ひざまずく。そのかたわらには、他の司祭たちが従っている。それから、彼は後ろをふり返る。その間に、かなりの人が外へ出ているが、前方に集まっている人たちもいる。彼は十字を切ってその人たちを祝福する。そして、ふたたび扉の外では、物乞いたちがひどい寒さに震えている。

翌朝。私は処刑された人を目の前にして、帽子を取り、数分間、佇んでいた。それから、身を切るように寒い戸外をぶらぶらする。この朝は偶然に幸運が重なった、幸せな朝だった。まるで眠りの精にうながされたかのように、早朝に目覚める。それから、だんだんと夜が白んでくる。眠りの精はドアを少し開けて、手で合図してお辞儀をし、愛想のよい老紳士のように、戸口から優しく「さよなら」を言い、ドアを後ろ手に閉めるのだ。起き上がると、手から櫛が落ちて、絨緞の上の小さな新聞の切れ端を指し示す。それに私はある住所を書き付けておいたのだ。その後、朝食の食堂に座っていると、給仕が来ない。私は立ち上がって、給仕を呼ばなくてはと思う。他の人たちも待っている。その時、給仕が入ってきて、すぐに私のところへやってきて、興奮の面持ちで謝る。それとは知らずに、私は呼び鈴を鳴らすボタンがある壁にもたれて、知らない間に鳴らしていたのだ。呼び鈴へと導かれていたのだ。さて、ぶらぶらと他の人たちの後について、道筋にある古い教会に入る。中では長い間、何も見えず、誰かが歌う低い歌声が聞こえるだけだ。それから、まばらなオルガンの和音。数人の学童たちと一緒に暗闇の中に

少し歩みだそうとして、私は場所を間違えていたことに気がつく。教会の側面から入っていたのだ。

左手を見ると……

左手には、荒々しい、不可解な線を持ち、炎が燃え上がっているような巨大な窓がある。音楽はいったいどこから聞こえてくるのだろうか。この教会からではない。隣接した別の教会からにちがいない。ちょうどバイオリンのような音色だ。だんだん物が見えるようになり、教会が広がりをもってきた。家の高さほどもあるステンドグラスの、どよめきと狂躁は静まらなかった。そして、その時、なんと、驚いたことに、すすり泣くような調べが始まる。この教会の中から、上の方からだろうか。悲痛な嘆き。この嘆くようなパイプオルガンの調べは、やはり別の教会からに違いない。振り返ると、白い服の二人の聖職者が見える。二人は燃えあがるような窓の下に姿を現して、壁のところで消えてゆく。遠くの奏者はしだいに音調を変え、一度、また一度と轟音を発してから、ふたたびハミングし、バイオリンの調べを奏でる。そして、六度音のパッセージが出会い、嘆くような三度の和音がこれに続く。ステンドグラスの窓が並んでいる方へと進む。黒いほとばしりを、青い流れとほとばしりが取り囲み、ところどころに緑が走り、黄と金色が貫流している。この大きく波打つ色の奔流が何を意味しているのか、分からない。これらは人間だろうか。時として、おとぎ話めいた眼と、長い髪が見えるような気がする。だが私はそこに何かを見分けようとは思わない。遠くから聞こえてくる男声合唱を聞き分けようとは思わないのと同じことだ。ステンドグラスの線は揺らめいている。暗緑色の花模様の窓。そして右手には、射し込んでくる激しい太陽の光と、まどろんでいた大量の色との融合から、たった生まれたばかりの、炎の赤よりも激しい色、これまで見たことがない悪魔のような赤黄茶色と、明るい黄色のステンドグラスがある。

今では明るくなって、かなり奥まで内部を見通せるようになった。堂内はマリア教会ほどには高くはない。だ

が、天井は同じような空色で、金色の星があしらわれている。そして、今や暗闇から解き放たれて、壁が姿を現し始める。壁は控えめに、黄銅色と緑がかった青色に彩色されている。日射しの翳りと照射、堂内はそれとともに、消えかけては姿を現す。支柱は素晴らしく生氣をおび、巨大な壁面は装飾文様で活気づく。色彩と震動する輪郭の横溢。この脇窓をどう形容すればよいのだろうか。緑の草木、あるいはそれに類したものや、花々の間に、巨大な白いユリが立っている。そして、そのずっと上には、すべてをおおうように、慈愛に満ちた、ゆるぎなき慈愛に満ちた青色がある。そこから、ゆっくりと、ひとつの王冠と頭部が現れてくる。それは天の元后、聖母マリアなのだろう。

教会は灰赤色に、目立たずに立っている。この教会には灰色の建物が付設されている。修道院だ。ヴイスピャンスキがこの教会に彩色をほどこし、窓を造った。外にある聖フランツィスクスの像に日光があたって反射している。

いたるところに教会がある。手入れがゆきとどいていて、壮麗なものもある。グロツカという商店街にある教会の前には、日向で法悦にひたる石の聖人像が立っている。半ば荒廃した王城——オーストリア人が兵舎をあつた丘の上に設けていた——ヴァヴェル城には、堂々とした二つの塔を持つ大教会がある。塔のひとつには、四方すべての壁に、大きな金色の文字盤をもつ時計がついている。その塔の下にある台座には、猛りたつた一頭の馬が威嚇するように立ち、背に一人の騎手を乗せている。奔放不羈の^(五)コシチューシユコだ。今にも城をまっしぐらに駆け下り、通りに駆け入らんばかりの勢いだ。ポーランドの王たちは、この教会の地下室や礼拝堂の石棺の中に眠っている。それは半ば教会であり、半ばは凱旋の並木通りと言えるだろう。閑清な建物のそばを通り過ぎる。感じのよい古風

な住居で、ここには修道士や修道女が住んでいる。通りで彼らの何人かと出会う。教え子の幼い子供や年長の少女たちの行列を率いている。神や靈妙への彼らの思いは、石の建築となつて、何世紀もの間伝えられてきた。一一世紀には聖^(六)アンドレアスを記念してグロツカ通りに教会が建てられ、聖^(七)カタリーナのために巨大な教会が建てられた。この教会からは、附設の修道院へ、石のアーチが通りの上に弧を描いている。けれども、この地における黎明期は更に一世紀さかのぼり、ヴィスワ河畔において、太古の亀のまぶたが開かれるように、岩の教会が創建されている。この教会は以前、河辺に立っていたのだが、世紀を経るうちに流れが後退してしまった。千年も前、この教会の中で殺人が行われた。当時、クラクフ司教スタニスワフは政治運動をおこない、大胆王ボレスワフを裏切つた。司教は怒り狂う王から逃れ、この教会に入った。だが、無駄だった。彼は無残にも処刑され、惨殺された。しかし、すぐさま、恐れ知らずのボレスワフは教皇によつて国を追ひ出され、惨めに零落していった。今では、五月八日になると人々がやって来て、贖宥状をいただく。庭園の噴水には薬効がある。その噴水も、今は凍結している。ひよつとするとこの聖人だろうか、石像が氷に取り囲まれて、凍えている。

昼時

四角い大理石の台座の上に、長靴を履いた長い巻き毛の男が立っている。外套は風になびき、手には地球儀を持っている。銘文によると、コペルニクスだ。彼は一四九一年、当地で学んだ。「天体の回転について」という書物の題名が挙げられている。一四七三年に生まれ、一五四三年に亡くなっている。

像は、アスファルトを敷いた、方形の非常に立派な中庭に立っている。アーケード、バルコニー、装飾窓、小さな上り階段、突き出た屋根が、周りを取り囲んでいる。鉄の扉はギイギイ音を立てて、容易には開かない。ここク

ラクフは、かつての繁栄の後、長い衰退の時代があった。夜、王宮ヴァヴェル城から、こちらへやってくる。城は霧の中につつまれ、その上には、眩惑するような乳白色の月が浮かんでいる。ヴァヴェル城の塔と建築群は影のようだ。それから、私の前にあるこの中庭も、夜の暗がりの中だ。寒々とした月の光が、くつきりと、青白く、アーケードを照らしている。しだいに暗闇から何かが現れてくる。高さのある、静物。それがコペルニクス像だ。

ポーランドのファウストことトヴァルドフスキ^(二〇)は中世のクラクフに住んだ魔術師で、悪魔と交わりを持った人物だ。ヤギエヴォ朝時代の図書館を探索する。敬虔なヘートヴィヒ^(二一)が寄贈したものだ。その中にトヴァルドフスキ博士が所有していたという大寫本があり、今でもなお、インクでできた悪魔の手の跡を認めることができる。天文学上の計算、赤と青で描かれた惑星の図表。コレギウム・マイウス、そしてコレギウム・ミヌス。ぶらぶらとずいぶんたくさんさんの図書室を見て歩く。青い丸天井の部屋はその昔、大講堂だった。一四世紀から伝わる古いヤギエヴォ王朝の図書室。巨大本、ニュルンベルク版書籍、リユーベック版書籍、論文、演説。一四、一五世紀の教授や学生たちによって書かれた自筆原稿。ある神学の講義はこう書き始められている。「神学の主概念は神である。神学は唯一の学問であり、神学は実践的学問である。」素晴らしい、見事な言葉だ。当時の学生たちはこれにはうんざりしたが、我々はこの言葉をふたたび、じよじよに理解し始めている。講堂、廊下、食堂、どこにも書籍があふれている。古い天球儀、フランス語の見事な時祷書、都市文書官バルタザール・ベームの素晴らしく精巧な冊子本^(二二)。美しい、古風な都市。まっすぐな通りや、曲がりくねった狭い通り。そこに立ち並ぶ家々の壁は、基礎のところ^(二三)が補強されている。何のためなのか分からないが、ひよつとすると地震対策なのだろう。市役所でガラス扉を開けると、静かな中庭が広がっている。石の階段を上がる。階段室はものすごく簡素で、ほとんど立方体だ。これが、静謐と安心を感じさせるこれらすべての建築物の秘密なのだ。これらの建物は、有機体として成熟したもので、自

然な感じを与える。ヴィルノの大学でも、ルブリンの古い塔でもそのようなことを感じた。これらの建築物が、そしてこの都市の中心部全体が、深遠な意味をもっており、訴えるものがある。現代に生きる人々が周りを行き交っている。広い中央市場広場には、色とりどりの籠を持った果物商たちの列が感じよく続いている。女性たちは、杓子や木製の攪はん棒を、清潔な敷地の上に広げている。黒い罐からタールの臭いが風に運ばれてくる。路面電車がベルを鳴らす。広場の中央には、軽快にステップを踏むように、織物会館がその優美な姿を見せ、その周りでは、商人たちがそれぞれの商品とともにくつろいでいる。織物会館にはアッティカ様式の装飾がほどこされ、両側面はアーケードで飾られている。正面の暗い入り口上部は尖頂アーチ造りになっている。そして、その内部の長い長い半円筒型天井をもつ空間には、電灯が、地下室のランタンのように、赤っぽく二列になって点っているのだが、闇を追い払うことができずに、いよいよ暗さを感じさせている。闇が光で、電球は赤い影だ。この赤い影の中、商人たちは壁際に座っている。彼らの売り台は旅行鞆や籠、玩具でいっぱいだ。

レースのように軽やかでいて、濃い闇がひそんだ、この装飾された細長い建物を、夜、さらに幾度か訪れる。大きな広場には、アーク灯の光がふりそそいでいる。広い海に浮かぶ船のように、古風で雅やかなその建物は、白い光の中に、くつきりと姿を見せている。電気照明、近代的遊歩道、自動車——そして、あの織物会館、そして、あのすらりとしたマリア教会。人を混乱させ、また感動させるこの二つの世界の並存。これらは互いに遭遇し、せめぎあい、いわばお互いの肩越しに口づけしているのだ。

死の世界と、新しい世界があるのだろうか。死の世界がどのようなものなのか、私には分からない。だが、古い世界は死んではいない。私は古い世界に、心底、強くひかれるものを感じる。そして、私は、私の羅針盤が信頼に

たることを知っている。それは審美的なものを指すことはなく、常に切実なもの、生命あるものを指し示すのだ。

この数日間というものの、私は、芸術愛好家の間を堂々巡りしていたことが分かった。織物会館上階にある大きな美術館、それからチャルトリスキ美術館を訪れた。フロリアンスカ門そばのチャルトリスキ美術館では、レンブラント、ラファエル、マティコ、それから磁器やポーランドの古い絨緞、武器を見る。織物会館上階では、これに對して巨大な絵画を見る。またしても天井まで届くようなマティコの絵、非凡なマルチェフスキ^(二二)。氷上を疾駆する絵には、咆哮するような力強さがある。一台の馬車を引いて、農家の肥えた雑役馬が四頭、激しく氷の地面を蹴っている。四頭は展示室の真中へいななき、躍り込んできそうな勢いだ。レムベルクで見たグロットガー氏の絵もある。その時、私は、案内者たちが話してくれることを聞いていない自分に気がつく。彼らは素晴らしく芸術を理解している。様式の推移をあくことなく教えてくれる。しかし、そんなことは私にはまったくどうでもよいことなのだ。最後に案内してくれた女性が、もうヴァヴェル城の美術館へは行つたかと質問したとき、私はぎくりとして、「ええ」と嘘をついたが、彼女が納得してくれ、ほっとした。彼女が古いフレスコ画を説明してくれた間中、私は生身の彼女を眺めていただけで、彼女が自分の家族や兄弟について話しはじめたとき、胸をなでおろした。

私はもう何日も、そのリユーマチのように痛む、不可解な憧れを胸に抱いている。そのような憧れとともに目覚め、日に三度はマリア教会へ行き、五分間、一〇分間と、頭上にいただいた穹窿に打ちひしがれるままになるのだ。これが、このようなことこそが、私がよりいっそう求めているものなのだ。これが私には欠けている。というのか、持つてはいるが、よりいっそう必要としているものだ。トヴァルドフスキ博士についてもっと話を聞くことができたなら、と思う。私はすっかり取り憑かれてしまった。

ある時、私はふたたび、幾つもの理由から私の心をとらえて離さないマリア教会の周辺をさまよう。その時、教

会の側面にバルコニーがあるのに気がつく。紛れもなくルネッサンス様式だ。私には、自分が望むものは、はっきりとしている。——だから、このバルコニーが主張しているもの、その本質を私は望まない。諸都市にある古代風建築の劇場がこの類で、ぞつとする。このバルコニーを目にしたり、そのギリシャ風の円柱や三角形のことを思う時、私が感じるものは、模倣という空虚な芸術的常套手段にたいする嫌悪感にとどまらない。古典性、ヘレニズム、人文主義を、私は徹底して拒否し、退ける。それらは市民たちのラウンジチェア、安楽椅子だ。この都市の教会や修道士、修道女たち、そして補強した壁をもつ建物の周辺で沈黙し、半円筒型天井の暗い空間からひんやりと顔をのぞかせては吹き寄せてくる中世に接近しつつある今、私は自分の立つべき所をわきまえている。私は晴朗な古典性と、美しすぎるギリシャ精神への敵対者であり、天敵だ。有害であるがゆえに、とりわけこれらの模倣と教育への敵対者だ。それらはきわめて優れたものかもしれないが、それらを利用する者たちによって、墮落させられてしまった。今はこれらのものに正しい評価を下すべき時ではない。自ら誠実であろうとする者は、これらのものを避けざるをえない。私は通例の、微温的で、貧弱な人文主義の敵対者だ。それはちやうど、今日のデモクラシー、このくだらないものにつけられた名称を、私が軽蔑するのと同じだ。大聖堂と、処刑され、血を流して苦しむ反逆者キリストの像をもつこの都市におけるほどに、このことが痛切に感じられるところはない。

馬がひづめについた泥を石でこすり落とすように、私は芸術と芸術愛好家たちを振り払い、あてもなく街の中を歩き回る。この街の中心は、マリア教会とその中に祀られた罪人だ。この罪人を、一人の人間、(二四)ファイト・シュトースが、その魂の苦悶の中から呼び出したのだ。あてもなく、気のおもむくままに、歩いてゆく。市の古い外壁の向こう側にあると教えられた清潔な近代的な建物は避ける。商店が立ち並ぶ、かまびすしいグロッツカ通りへと心ひかれる。どこことなく、不穩、不潔、貧困、苦惱、無秩序が感じられる。法悦にひたる聖人のそばを通り過ぎる

と、広場ではないが、大きな通りが開ける。そこにはおかしな建物がある。ホテル・ロイヤルといい、高くて宮殿のようだが、古くてすすけており、ユダヤ人たちが出入りしている。褐色のケーブをはおり、黒色のつばの広いソフト帽をかぶった、背の高い男性が私のそばを通り過ぎてゆく、——右手に丘があるのだ。赤い煉瓦造りの円塔の上空で、カラスたちが輪を描きながら、鳴き叫んでいる。丘の上には、赤い鋸壁に囲まれて、一群の建築物が広がっている。その鋸壁は力強くこちらへ下つてきて、どつしりと通りにまで達している。そして、しつこいを塗ったばかりの、平凡な建物を取り囲んでいる。兵舎のような建物だ。その丘のふもとに沿って、落葉した立木の間を抜け、うち捨てられた公園に行く。荷馬車がみすばらしい倉庫の前で荷を下ろしている。カラスたちが相変わらず鳴き続けている。広い道が丘の上へと通じている。だが、上へは行きたくない。そうだ、あれは賞賛される城、ヴァヴェル城だ。しかし、上へ行くのは何ともはばかられる。それは私の感情で、下をまわって行くようにと私に求めるのだ。私はちょうど、ご婦人に抒情詩の朗誦を聞かせられながらも、その人の靴のヒールを見る人のようにだ。そしてこう考えるのだ。彼女の靴はどのくらいするのだろう、どのような暮らしをしているのだろう、何で生計を立てているのだろう、なぜ朗読したいのだろう、と。壁が鋭角に曲がった角のところで岩が露出している。ここからはすっかり野外だ。女中たちが犬を散歩させている。丘の斜面では白と褐色の雌牛が草を食んでいる。瓦礫が捨てられて、山のような堆積がいくつもできた、荒れた野原。牛は何ともリズムカルに草を食み、時おり、長い白い舌を出している。野原が傾斜している。だが、もはや野原ではない。下に何があるのか、気がつかなかったのだが、河だ。広い、黒ずんだ、穏やかな河が流れている。船は通っていない。その向こう側では、蒸気自動車が、蒸気を上げてがたがた走っている。またしてもヴィスワ河だ。またしても都市から締め出されたのだ。私は丘を取りまく壁のことはうっちゃって、湿地を渡って、河にかまける。湾曲部で河がさらさらと音をたてて流れるのを聞

いて、興に入る。ひどいことに、河辺にはモルタルやごみが投棄されている。湿地がひどくて進めなくなり、そこから離れざるをえなくなる。ぼろのタオルや、赤と白の前掛けが掛けられた、錆びた有刺鉄線がはられた、小さな汚い建物のところで向きを変え、ふたたび壁にそって歩く。壁は、緑の丘の上へと後退していたが、今ふたたび、円形の建物や窓とともに戻ってきた。上には堂々たる城の教会がそびえ立ち、その前では、コシチューシユコが馬にまたがっている。城への正面入り口だ。上り道の壁にはタイルが多数貼られている。タイルには、城の修復に寄付をした都市や個人の名前が書かれている。そして、この真打は、——みすばらしいホテル・ロイヤルがもう見えてきた——重々しく上の方へ延びてゆく壁のその上の、修復された、円柱と列柱廊のある建造物だ。路地に小さなブリキ製品を積んだ農家の馬車が止まっている。女がその荷台の藁に座って、プチパンをかじっている。女は埋葬する時のように、不格好な布を馬にかぶせている。馬は馬車のながえをかじりながら、眠そうな眼で見ている。

ホテル・ロイヤル。私はあそこへ戻るべきなのだ。そうだ、戻らねば。私はファウストことトヴァルドフスキ博士を探しているのではないのか。ユダヤ人だ。ユダヤ人たちが歩いている。絶え果てたもの、生きてはいるが、姿を消してしまったものを、私は見たい。修復されたものなど見たくはない。黒い上着に毛皮の帽子をかぶって、この歩道をゆく人たち。私には彼らが分からないだろうか。ユダヤ人たちだ。電灯に照らされた、市場の闇。海に浮かび上がる魔法の船。回り道をせず、これらのものを見なければならぬ。

進歩的なユダヤ人啓蒙主義者たちが言うだろうことは、私には分かっている。彼らは、自分たちと同じ民族の「愚かな、時代遅れの」人々をあざ笑い、恥と考えているのだ。彼らは私にも月並みな嘲笑をあげせるだろう。世界が自分たちとともに生まれ、もっぱら自分たちとともに完成された。愚かな、時代遅れの人々がしがみついている

る、こんな古いおとぎ話を語るなんて、何て無知で、馬鹿げているのだろう。そんなことは現実のことじゃあないんだ、と。私は、これらの啓蒙主義者でもないし、一般民衆でもない、西欧の旅行者だ。私には、これらの「合理主義者たち」が、ぶらぶらする手首に不潔なカフスをつけ、水夫たちにもらったガラス玉で身を飾り、へこみのついた真新しいシルクハットを頭にのせてパレードしている黒人のような感じがする。彼らにこのカフスを贈る西欧世界とは、なんと貧しいのだろう、なんと卑しく下劣で、心がないのだろう。このことを彼らに気づかせるにはどうすればよいのだろうか。

晩に、クラクフのユダヤ人街カジミエシュ地区の狭い路地にある、明るく照らされた小さな祈祷所から、三々五々男たちが出てくるのを見かける。白い靴下に短靴を履いて、耳まである大きな毛皮の帽子、シュトライメルをかぶっている。私の案内人が、このあたりの路地に現れるベーリシエルという変わり者の老人について話してくれ、私はその話をかみしめるようにして聞く。彼はオランウータンのように毛でおおわれている。以前はかなり気ままに暮らしていたが、今では肉を食べず、外へ出るとき聖句箱と礼拝用肩衣を身につけ、靴の中に石を入れてい(二六)る。彼は人々に恐れられている。

古いシナゴグへ入る。祈祷はもう終わっている。そこは「カージミール皇帝」の図書館だったところだ。カージミールは天使のごとくに座せり。トローラーをもちたる老ユダヤ人ども、クラクフへの受け入れに深謝しき、と書かれた銘板を私は以前通りで見たことがあった。シナゴグの控えの間「ポーリツシュ」の壁には、今でも、裁き手であるレッベに有罪を宣告された者をつなぐ鎖がぶら下がっている。そこは人々が罪人に唾を吐きかけた晒し場だ。ヤギエヴォ朝時代の図書館の書物にあつたように、神学とは実践的学問なのだ。「日の出の番人」というグループがある。彼らは早朝に集まる。老人たちだ。夜のまだ明けきらぬ前に教会堂へ入る時には、扉を三度叩くそ

うだ。夜の間は、中で霊が祈っているのだ。夜に教会堂のそばを通り過ぎてはいけない。昔、一人の人が通り過ぎようとした。その時、その人は、中でトーラーを朗読するよう呼びかけられた。彼には何も起きなかった。ただ、出て行く時に、ふり返ってはいけなと言われた。人々が祈祷所で読む本やカバラについても、話を聞く。カバラは後になってから学ぶものだという。非常に若く、はや一六歳でカバラを学び始めた者がいた。彼は引きこもって、書を読むことに没頭した。もはや人と話をしなくなり、塩とパンしか口にしなかった。母親とも話さなくなった。そして、まもなく他界した。彼の父親はタルムードの注釈を書いたラビだった。このカバラには「世界の秘密」が秘められている。そこには、すべての人間を見守っている天使のことが書かれている。カバラ学者はトーラーの言葉を一語一句分析し、一つ一つの文字が何を意味しているのか、救世主がいつ現れるのか、そして、邪悪な天使サマエルと彼の妻マルカシユヴのことについても述べている。次の話は人から聞いたものだ。

ユダヤ人の間では、三六人のツァディックがいることが知られている。ツァディックとはレッベではなく、民衆の中にいる匿名の義人のことだ。彼らは正体を現すことは許されず、また、誰も彼らのことを知らない。彼らは靴屋だったり、仕立て屋だったりする。世界はこの三六人の、人知れず隠れた義人の手に委ねられている。彼らがいなくなれば、世界は滅びる。彼らの一人が亡くなれば、新たに一人が生まれる。かつて、ポーランドの偉大な女王ヘドヴィガがユダヤ人を滅ぼそうとしたことがあった。ユダヤ人たちは途方に暮れた。その時、彼らの最も偉大なレッベが、どうすればよいかと、神にお伺いをたてた。神はこれに応えて、一人のツァディックを送ったが、彼は名乗り出ようとはしなかった。追い詰められた人々が急ぎ立てては、訴えたので、とうとう彼は折れた。彼は宮廷へ出向いて、こう言った。「誰でも自分のポケットに手をつ突っ込んだら、望みのものを取り出せます。」そして、そのようになった。しかし、ヘドヴィガは蛇を取り出した。蛇は彼女の身体に巻きついた。それで、女王はツァ

ディックに懇願し、どうしてもなにか尋ねた。「そうになったのは、あなたの下した判決のためです」、と彼は言った。それで彼女が命令を取り消すと、蛇は消え去った。

ある婦人向けの本にのっている、泉のほとりの騎士の寓話。一人の騎士が砂漠の中で泉を見つけ、水を飲んだが、うっかりして財布を置き忘れてしまった。貧しい男がやってきて、同じように水を飲んだ。男は財布を見つけ、これを奪い去っていった。しばらくして、騎士が大急ぎで駆け戻り、財布を探した。泉のほとりには、たった今水を飲み終えたばかりの、別の貧しい男が座っていた。騎士は男に財布のことを尋ねた。男は何も知らなかった。しかし、騎士は男の言うことを信用せず、これを打ち倒した。天国に、モーセがおいでになった。神はこの殺害をご覧になり、モーセにここで生起したことをお見せになった。モーセは驚いて、恐ろしい不正が起こってしまった。とおっしゃった。すると、神は次のようにお答えになった。「お前にこのことを説明してあげよう。騎士は、財布を取った物乞いを打ち殺した。だが、この物乞いは何年も前に、この騎士の父親を打ち殺したのだ。だから、今度は騎士がこの男を殺したのだ。だが、男は財布を持ってはいない。財布を手に入れて喜んでるのは、最初の物乞いだ。けれども、この最初の物乞いとは誰だろうか。これは、騎士が力づくで全財産を奪い取り、零落させた男なのだ。だから、男は今、全財産を再び取り戻したのだ。」

小さな通りを歩いていると、私の案内人が悲嘆の声をあげた。親しくしていた若い娘が一週間前から行方不明なのだ。娘は聡明で、仕事もよくした。つい一週間前に、彼女はある講演を聴きに行った。彼もそこにいた。彼女ははしゃいでいた。そして、講演の後で、ある人を訪問した。彼女は何気なく、人は自殺をしても埋葬されるのか、また、どのようにして埋葬されるのか、と尋ねた。その後、彼女はもう家へ帰ってはこなかった。両親は、売春婦を売買する業者に誘拐されたと思っている。彼女はかわいくて、小柄で、肉体的にはまだ十分發育していなかった

が、精神的にはとても快活で、はつらつとしていたという。私にはまったく彼を慰めることができない。

カジミエシュ地区のシナゴーグの前の、広い市場広場をゆく。老朽した、小さな建物が広場を取り囲んでいる。その一画に、壁で囲まれ、閉ざされた所がある。古い墓地だ。そこに立っていた家について、言い伝えがある。その家では婚礼があった。金曜日のことだ。婚礼の祝宴は神聖な安息日になっても続けられた。その時、祝宴がおこなわれていた家全体が、新郎新婦も招待客ももろともに、すべて没してしまった。この広場のかたわらには、一人の偉大なレッベが住んでいた。^(二九)レモスことラビのモーゼス・イセルレだ。彼の小さな家は今でも立っている。二〇〇年前、彼はそこで暮らし、今は古い墓地に眠っている。享年三三歳で、三三冊の本を書き、^(三〇)過ぎ越し祭から^(三一)シャブオット祭の間の三三日目のラグ・バオメルの日^(三二)に亡くなった。

一枚の奇妙な紙片が目にとまる。チラシのようなもので、産婦の家にあったものだ。陣痛の始まった産婦の部屋の四方の壁全部に、このような紙片が貼られていた。ヘブライ語が書かれていて、風変わりな縦の段組になっている。内容は次のようなものだ。

「ご信賴申し上げます神様、どうぞ私をお護りください。あなたの白い眼のように、私をお護りください。あなたの翼の陰に、私をおかくまいください。あなたは私の砦です。私を包囲する敵から、私をお救いください。イスラエルの英雄の中から帯剣した六〇人の英雄が、ソロモンのベッドの周りに立ったように。夜を恐れる彼のために、英雄たちは皆、剣を帯びていたのです。

パールシエムより、安産の祝福。偉大なる、崇高なる、イスラエルの神の御名において、彼の天使たちが、あなたを、もろもろの道において、お護りくださるでしょう。神よ、サタンを八つ裂きにしたまえ。

シナート、ヴァスインサナフ、ヴァスマンガリフ。アブラハム、サラ、モーセ、アーロン。イサーク、レベッカ、ダビデ。ヤコブ、レア、ソロモン。

魔女を生かしておいてはならない。

魔女を生かしておくのは、だめ。

魔女を生かして——おかない。

生かしておくのは——魔女じゃあない。

生かしておく、でも魔女はだめ。

魔女は——生かして——おかない。

アダム——イブは内に。

(三三)
リリースとその連中は外にとどまれ。

山岳地帯を見やる。^(三三) エリヤが歩いていた時、途中でリリースとそのやからに出会った。エリヤは言った。『これ、穢れた身で仲間を引き連れてゆくとは、何事だ。』リリース『子供の生まれた家に決まっているじゃないか。子供に死の眠りを吹き込んで、命の火を踏み消し、骨の髄を搾り出して、ただのかばねにしてやるのさ。』エリヤ『お前を神の御前で調伏し、石のように口を利けなくしてやろう。』リリース『師よ、私を放免してください。そうすれば、私は退散いたします。そして、母親と、その子供に対する企みを捨てます。そして、私の名前か、あるいは他のいくつかの名前が唱えられるのを聞いたら、その時にはいつでも退散いたします。』

す。イスラエルの神の御名において、このことをお誓い申します。それでは、名前を申します。ひとつでも名前を唱えたら、その時にはいつでも、私は母親に手出しできません。それから、私たちの仲間の名前をお教えします。それらの名前を母親の家の壁に掛けておくように、教えてやってください。その時には、すぐに退散いたします。名前は、リリス、シャトリノー、アプスタ、アミソ、アミトレフォ、カシャシュ、オーダム、イク、ポドウ、アイル、パトリッツ、アシュエ、カータ、カーリー、ビドウナ、タルチュ、パクシャ。』

呪術だ。これは魔除けのお守りなのだ。カメーと呼ばれている。『ラジエルの書』という古書からは、他にも呪いや呪文を知ることができる。こうしたことはややもすれば、迷信として片付けられてしまう。——だが、それは密かに生き続けている。死者崇拜と同じように、生き続けているのだ。それは言葉と現実との結びつき、いや同一性への確信から生い育ったもので、カバラ主義の精髓であり、古代の神秘的感情の発露だ。すばらしい古代の思考法なのだ。『存在するものは、理性的である』というヘーゲルの概念とは、なんと遠く、（あるいは密かに近接しているのかもしれないが）隔たっていることか。現代人は、可視的動物的活動において、言葉や記号が生じると考え、歴史的次元の研究で満足している。だが、ここではまず、言葉が創造するのだ。ドイツ的なゲーテのファウストは、この命題を否定するところから始めている。彼は真の古代的ファウストではないのだ。素朴さと深遠さとのなんという混合。

難産の時には、産婦の右耳に悪魔の名前をささやき、「汝とそのすべてのやからよ、でてゆけ！」と言うように、ラジエルの書はすすめている。女性を征服しようとする時は、自分の顔から出た汗を集めて、それを新しいコップに入れ、銅片を手に取り、それに「シトロネ」と書く。「その小片をコップに投げ入れて、天使よ、なにと

ぞこの女性の心を私に向けて下さるよう、切にお願い申しあげます、と祈りなさい。月末の木曜日の朝四時に、コップを手に取り、隠しなさい。」これはドイツ中世を思わせる呪術だ。こういったことは全世界で行われている。我々現代人は、自然の力を外部から支配し、利用しているが、これを我々の内部から誘導することを断念しているのだ。

いにしえの「創造の書」に書かれていることについて、若干のことを聞きかじる。私にはほとんど理解できず、おぼろげに想像するだけだ。

「創造の書」の成立年代は不明だが、注釈が山ほどある。これほど謎に満ちた書物は他に例をみない。まるで、我々とは異なる人種が語っているようだ。だが、我々の時代も当時と同じように長くはないのだから、当時の知恵に耳を傾け、それを信じないとすれば、愚かなことだ。ネアンデルタール人は何を考えたのだろう。どのような源泉に従ったのだろうか。イナゴは何を考えているのだろう。森の白樺は？「創造の書」は言う。

「万軍の主である神は、知恵へと通じる三二の隠された径路を描かれた——神は、数字、数字を数えるもの、数えられるもの、という数の三つの原理によって、世界を創造した。」

「一〇の数字は何ものでもなく、稲妻のような外観を持ち、無限である。神の言葉はそれらの数字の中を行きつ戻りつして、神の命令が下れば、嵐のようにはせ参じ、その玉座の前にひれ伏す。」

「二二の文字。彼はそれを描き、刻み、清め、量り、その一つ一つを他のすべてのものと入れ替えた。これらのものによって、彼は全宇宙を形成した。」

「基礎である二二の文字は声の中に書かれ、魂の中に刻み込まれ、口の中の五つの場所に付着している。」「彼は

空から有を創造し、無から有を作った。そして、手でつかむことができない空気から巨大な柱を彫り出した。」

「彼は文字の^(二四)𐤀(ヘー)をして言葉を支配させた。彼はそれに王冠を結びつけ、融合させた。彼はそれによつて、宇宙の中の白羊宮、一年のうちのニサンの月、身体の右手をつくり出した。

彼は文字の𐤆𐤃(ヴァヴ)をして思考を支配させた。彼はそれに王冠を結びつけ、融合させた。彼はそれによつて、宇宙の中の金牛宮、一年のうちのイヤルの月、身体の左手をつくり出した。

彼は文字の𐤆𐤓(ザイン)をして歩行を支配させた。彼はそれに王冠を結びつけ、融合させた。彼はそれによつて、宇宙の中の双子宮、一年のうちのシバンの月、身体の右足をつくり出した。」

聖書の歴史的な物語は神の啓示で、ヤコブが何頭の牛を所有していたか、王がどのようにに戦ったかが重要だとされるが、カバラ学者はこのようなことを嘲笑している。あらゆるものが、別の何かを意味していることが分かった時にのみ、それが神の啓示だと了解することができるのだ。

今度はラジエルの書を取り上げよう。その中には怪奇な素描が入っている。ある人が読み聞かせてくれる。

「神はひとつの名前を手に取り、それから三滴の水をつくった。そして、全世界に水が満ちた。神の栄光は水をおおい、これを三つに分けた。三分の一は神の言葉に従い、三分の一は水源の内に、三分の一は水の上に分かれた。

それに続いて、神は二つ目の名前を手に取り、三滴の光を押し出した。そして、三つに分けた。一つはこの世界に、二つ目は将来の世界に、三つ目は救世主の世界に。

それから、三つ目の名前を取り、三滴の火をしばり出した。そして、三つに分けた。一つからは天使、二つ目からは神聖な動物、三つ目からは火。

こうして、水と光と火が生じた。神の右に火、左に光、下に水があった。彼はすべての材料を手に取り、混ぜ合わせた。水と火を手に取り、それらのものから天をつくった。水と光から、彼の玉座を、そして、火と光から、神聖な動物をつくった。」

「ある天使の名前はアルツイーツォという。エレツ、すなわち土地という呼び方はここからきている。それから、神は大地からちりをつくった。そして、地上の天使はアドミエルという。アダムはここからきている。」

「神は、世界をどのように創造したらよいか、トーラーと相談した。トーラーは神の手によって、白い火と黒い火で書かれていた。そして、トーラーには、神の御名がその右手によって書かれていた。彼は自分が創った世界で孤独^⑥だった。その後すぐに、神は両手を伸ばして、一つの名前を手に取り、それから三滴の水をつくった。」

「世界全体は縦五〇〇、横五〇〇の大きさである。そして、世界の基礎のところでは、大きな海が世界の周りを回流している。そして、大きな海と世界と境界線はすべて一本の柱に支えられている。この柱はツァディックという。ツァディックが世界を支える土台といわれているからだ。そして、この柱と世界はレヴィアタンの一枚のうろこの上に立っている。レヴィアタンは海の中の小さな魚のように、一番下の水に住んでいる。一番下は一番上に対して、岸辺の小さな湧き水のような。一番下の水は泣き水と呼ばれる。神が水を分けて、一番上の水を取ってしまったので、一番下の水は泣いて、上へ上がろうとしたが、神が押し下げてしまったのだ。一番下の水は一番下の大地の上にぶら下がったままだ。」

肌を刺す冷たい風が吹く中、曲がりくねった、暗いひっそりした小路を歩く。ゲットーの路地は金曜日^(二五)の夕方になると、突然、人が死に絶えてしまったかのような。行き来する人はいない。仕事で走る荷車もない。路面電車は

空っぽで走っている。家々の窓が明るく並んでいる。人々がロウソクを点し、父親を囲んで、食事の用意ができたテーブルに座っているのだ。父親が堂々と王者のように座って、歌を歌っている。

——この段階にたち戻ることができたなら。私も、他の人も。聖フランシスコ教会では、壁や壁龕が見えるようになるまで、ずいぶん長く突っ立ったままでないかならなかったが、そのように——私の目は暗闇を見通しつつある。そして、実はとっくに見通してもいたのだ。これらの教えの暗闇ではなく、現代という時代のそれを。

ユダヤ人の学識ある進歩主義者と一緒になる。彼は言う。狭小な正統派は、伝統を絶対視し、厳守している。正統派はモーセが毛皮の帽子シュトライメルをかぶっていたと思っっているのだ、と。そして、その学識家は、特にハシディズム信奉者に特徴的なのが、レッベに対する彼らの信仰だ、と言う。私がワルシャワの慰霊祭のことについて述べると、彼は、人々は靈魂の存在についておぼろげな観念を持っているだけで、そんなことはこれっぽっちも聞きたくない、と不満をあらわにして、むしろ反対に、これら正統派たちが現代の西欧的教育を拒否していることを強調した。

彼は、ユダヤ人問題についてはただひとつの解決策しかなく、ユダヤ人問題とは単にユダヤ人の問題にすぎない、と信じているようだ。

あちらこちらと歩き回っていて、別の人と一緒にいる。この人はラビを賢明な、驚嘆すべきラビとして、正統派の本来の拠り所だと思っている。彼らはいわばバラモンで、懷具合にひびくというお決まりの理由で、今まさに階級制度の廃止に反対しているところだ。

昨日のトラー^(二二六)の歡喜祭では、人々はトラーを持ってゲットーの路上で踊った。新月の日には、敬虔な人々は戸口から出て祈りを捧げる。^(二二七)

魚市場を横切り、「闇横丁」を抜けてエステル通りに出ると、目の前に、大きな正統派の男子学校(二八)のタルムード・トラー校がある。少年たちが数人ずつ固まって、玄関へ通じる道を空けてくれる。古い大きな建物だ。犬が二匹、吠えながら玄関道に飛び込んでくる。一人の少年がおびえて「ママ、ママ」と叫んでいる。すらりとした、若い、赤鬚の男性が私を案内してくれる。その他に、長い上着を着た人が数人同行している。がっしりした体格の白髪の男性は市の学務課の人のようだ。

この老人は非常な赤ら顔で、父親のように誠実だが気難しい顔つきをしている。肩幅が非常に広い。彼ら全員の肩や袖についた、壁の白いしつくい汚れはもう気にならなくなった。老人は、時には無関心に微笑み、時には辛らつなことをつぶやいて、穏やかだが、あら探しをするような眼で、物事を見ている。何十年も前から、彼はすべてのことを知りつくしているのだ。彼は両手を深く外套のポケットに突っ込んでいる。そして、ごくゆっくりと、古い石の扉を通って、ぶらぶら私たちの前を歩いてゆく。私はすぐさま、ここには西欧の学校がもっている訓練とか、堅苦しい権威主義の痕跡がないことに気づく。厳格に、といってももちろん違った風にだが、家父長的・家庭的に行なわれている。古い扉が壁に吊り下がっている。「ここにはまだいるだろう」と老人が開ける。教室だ。

そう、教室だ。長い褐色の鬚を生やして、丸いキツパをかぶった若い男性が、一段高いところで、回りを見下ろすように立っている。その前の小さな斜面机には本が一冊のついている。彼と、ベンチに座っている一人の少年との間で、私には理解できない、奇妙な会話が始まる。少年たちは彼を取り囲むように、小さなベンチに座っている。彼らは会話ではなく、二重唱をしているのだ。時おり、少年の隣にいる子供がそれに加わる。少年はぶつぶつ言っていて、それからまた歌い続ける。一番後ろの席で、本を持った中年の男性が二人、耳を傾けている。彼らは一言も言わずに、不意に、後にいる私に手を差し出す。老人が重い足取りで外へ出てしまった。私はまだいたいのだが、彼

は別の教室へ行こうとしているのだ。その教室は、歌声と眩き声と話し声であふれている。ここでもまた教師が壇上にいて、本を持った少年がその隣にいる。二人の間で熱心なやりとりが行なわれている。その間に、その他の八歳から十二歳までの四〇人の少年たちは、本を前にして周囲のベンチに座り、上半身を軽く、あるいは強く揺すっている。数人は激しく猛烈に揺すっている。そうしながら、彼らはささやき、話し、歌い、ぺちやくちゃしゃべっている。「みんな学(二九)んでいるのです」と赤ら顔の老人が見下ろすようにして私に言う。全員がかわいい黒のキツパをかぶっている。それらは磨いたように光っている。こめかみの巻き毛は長く垂れている。少年たちが立ち上がる。授業が終わったのだ。彼らは私たちのかたわらを扉の方へ駆けてゆく。何人かは真剣な面持ちで、おとなしく出てゆく。黒い、もの憂げな、彼らの眼の輝きはどうだろう。そしてまた、新しいクラス。年長の少年たちがタルムードの一節を学んでいる。部屋はどこも木で仕切られているだけだ。ぶつぶつ言う声、入り乱れた話し声、学びの歌声が右からも左からも聞こえてくる。九〇〇人を超える生徒が、この古い大きな建物の中で学んでいる。このような学校を、私ははじめて見た。

このような敬虔なユダヤ人たちの学校を、もうひとつ見学する。近代的な建物で、女学校だ。彼女たちは宗教に加えて、装飾、洋裁、家政を学んでいる。これ以外のことで、敬虔なユダヤ人たちが少女たちを気にかけることはない。

グロツカ通りを抜けて、中央市場広場へ。織物会館、聖マリア教会、そして、磔刑に処せられた人。すべてが象徴的だ。磔にされた人も、「創造の書」も同じ次元のことなのだ。だが、聖マリア教会で、頭をたれた女性たちが、ロザリオを手にして出てくるのを目にすると、ためらってしまう。聖人像、香煙——私はこれらのものを好き

ではない。私の思いは、処刑された人という圧倒的な実在に向けられているのだ。それから、レヴィアタンは、そして一番下の大地にぶら下がったままの泣き水は、この場合だろうか。まだ断ずることはできないだろう。私は磔にされた人から離れることができない。彼に心を引かれる。義人、ツァディク、世界を支える柱——そうだ、彼らは磔にされ、処刑された人のことなのだ。ちょうど、あの教会のステンドグラスが次第に色調を強め、赤々とした輝きを放ちはじめた時のように、あの人が、次第に力強く、というよりも、いよいよ苦悶の度を深めて、ふたたびあの人がある。平穩に暮らしている人もいれば、水の中へほうりこまれて、まさに溺れ死のうとしている人もいる。義人とは、処刑された人とは、そのような人なのだ。

飾り気のない店舗がならび、たくましい商魂が入り乱れるグロツカ通りを行くと、商人、足早な弁護士、芸術愛好家、学生たちがいる。彼ら商人やインテリたちは自分のことに精出していればよい。卑劣で、あてにならないインテリ連中が私は嫌いだ。精神の名折れだ。

私を感じているものよりも、路面電車の方がより現実的というわけではない。義人の、そして、処刑された人の圧倒的な実在に対して、打ち消すことのできない魂の恐れに対して、路面電車は対抗できるだろうか。

ところで、私の案内人は間違っていなかった。一週間前に行方不明になった娘さんが発見されたのだ。彼女はヴィスワ河に浮かんでいた。なぜ、彼女は自殺したのか。遺体は水に入ってから、一日しかたっていないだろうという。それまでの間、彼女は何をしていたのだろう。母親は依然として、娘はさらわれて、殺されたと主張している。遺体は解剖される予定だ。

教会とカバラの暗闇から帰還してみると（帰還してはいないのだが）、このクラクフの市街は清潔で、美しい。私がポーランドで見てきた都市の中で、最も美しく、清潔だ。だが、私はそのような市街には用はない。それに、

私はたちまち気分を損なわれてしまった。なんて世界だろう。中央市場広場付近で、私は、明るい色の長靴下をはいて、白粉をつけたポーランド美人たちをみかける。ふくよかな体つきで、魅力的な、鋭い、挑発的な顔をしている。彼女たちは私から、三メートルとか五メートル離れて歩いているが、没交渉というわけではない。空気をとおして私の方へせまってくる。彼女たちは皆、灯火によって私の方へ呼び寄せられるのだ。ふと、織物会館の美術館にあった一枚の絵が思い出される。裸体画だ。頭部は不快だが、肉感的な捉え方は卓越しており、絶妙な描写だ。左脚が、獣そのもののように、前方へ踏み出していた。私はそこに、高等種の馬、特別な皮膚をもった馬を見た。市街のいたるところでこのような執拗さに遭遇する。

夜の散策、幸せいっぱい笑い。カフェは人でいっぱいだ。菓子屋から彼らは小さなキャンディーの袋を持ち帰ってゆく。すべてがお決まりの通りだ。人々は快適さと楽しみに浸り、動こうとはしない。凝り固まってしまう。享樂に操られ、飽食し、満ち足りている。処刑された人がこの市の真中にぶら下がっているのだが、教会の中だ。そして、人々はそのまわりに、絵画や色とりどりのものを山のように積み上げてしまっている。

生には発破をかけ続けなければならない。このことを、我々はすぐ忘れてしまう。生は飽食し、肥大しようとするものだ。

歩いていると、すぐに邪魔が入る。しかと捕らえることはできないが、何かがしきりに脳裏をかすめるのだ。建設現場の板囲いに、「賢者ナータン」^(三〇)と「コーン伯爵」^(三一)を予告する映画館のポスターがある。ヘンリー・マルトーが二日後にヴァイオリンを弾く予定だ。眼鏡をかけて、濃い口髭をたくわえた、鬢の老紳士の写真がある。その下には、「著名なシヨパン演奏家」とある。

その時、ひとつの観念が私の頭の中で疼きはじめる。それは何年か前に、ヴィースバーデンで、健康な人たちがや

病氣の人たちが保養地の楽団を前にして座っているのを見たとき、私を襲ったものだった。人間が大勢地中に横たわっているのだ。二メートル、五メートル、一〇メートルの地下に、死者たちの巨大な群れが横たわっている。全軍隊が。ナポレオンの時代に戦争した軍隊が、そしてもっと以前に、アレクサンダーとともにインドへ行軍した軍隊が、すべて、四肢を伸ばして、地下に横たわっている。ローマ人たち、シーザー、ティベリウス、アルプスを越えるゲルマン人たち、皆、地下に横たわっている。彼らには、今となつては、ローマもゲルマニアもない。何があるというのだ。我々にとつても、ローマもゲルマニアも、クラクフもベルリンも色褪せて、無意味なものになってしまう。音楽、芸術の発展、そしてあらゆる乱痴気騒ぎが無となつてしまふだろう。何百万人の死者にとつて、この都市の大聖堂がなんになるのか。そんなものは存在しない。そんなものは——死者からは吐き出されてしまっている。市場も舗装道路も——吐き出されてしまっている。毎日ここを通り過ぎていった人たちの幾人かは、昨日亡くなった。この人たちの視線のいくらかは、まだこれらの窓ガラスに名残をとどめている。けれども、中央市場広場や大教会は彼らにとっては、今では無意味だ。煙のように消えてしまったのだ。私には——広場も通りもまだ幾らか意味を持っている。だが、私はまるで、早くもそれらのものから距離を取り、後退しつつあるような、そして、それらのものが遠ざかってゆくような気分に襲われる。それらが硬直し、遠く離れ、色を失つてしまふ。そして、私は死んでしまふ、この瞬間に、死んでしまふ。

私はホテルの部屋に閉じこもらないではいられない。それから市街へ、市街だけへ。

ある写真家のショウケース。長いイブニングドレスを着て、おめかしした、二〇代終わりの女性が、手の甲にあげて、安楽椅子に座っている。白いサテンのドレスで、優雅に胸をのぞかせている。小さな、コケティッシュ

な帽子を目深にかぶっている。いかにも得意顔で、満面に笑みを浮かべている。笑みで彼女の眼は小さく見える。彼女の隣には、理解に満ちた微笑を浮かべた平凡な女性。とても若く、椅子に腰掛けていて、膝の上で手を組んで、くつろいで座っている。穏やかで、人なつっこく見える。しわひとつないその若々しい顔には、もう母親のような愛情が感じられる。ここは感じがよく、親しみがもてる。私は行くべき方向を見定め、改めなければならぬ。

街角のフロリアン通りという名前が目にとまる。狭い通りだ。学生や当世風の女性たちがあたりをぶらついている。とあるシヨウウインドーの中の一枚の絵に、幸せいっぱい母親が横たわっていて、その胸の上には、赤ん坊が乗っかっている。こざっぱりしたこの通りの終わりにあって、小さな教会だと思っていたものは、路面電車が通過する古めかしい門だ。古い外壁は方形になっていて、緑の屋根をいただいている。両側には壁がつながっている。これは昔の市壁の遺構だ。その下を辻馬車が走り、祭司たちが黒衣の裾を引きずるようにして歩き、子供たちが女性たちの手につかまって歩いている。それから、旧市街を出ると、広場があり、「プランテン」と呼ばれる公園が壁に沿って続いている。門の外には、銃眼をもった砦のようなものが立っている。腫れぼったい、ばかどかい鼻の老ユダヤ人がその周りを歩いて、すき間から覗き込んでいる。近代的な建物と通りが広がっている。ポーランド銀行は恐ろしく近代的な砂岩の建物だ。ちょうど、上の足場に、赤い砂岩の三体の女性像が据え付けられているところだ。落ちたらどうしよう。まっすぐに広い通りへ出ようとして、足がもつれる。縁石が大男向きに作られているのだ。この通りの真ん中に、皇帝ヴィルヘルム一世か二世、あるいはフランツ・ヨーゼフ、あるいはソビエスキが立っている。彼は馬にまたがり、台座の上にのっている。月桂冠もあるのだろう。行ってみると、台座に「ゲルンヴァルト」と書いてあり、瀕死の騎士が台座から落ちようとしている。反対側では、誰かが鋤を押しているよ

うに見える。だが、太陽が眩しくてよく見えない。この時、別の馬に関心をひかれる。というのは、バターを積んだ荷車が、この記念碑そばの建物に入ろうとしているのだが、建物が立っているところが、車道より高すぎるのだ。駄馬が転倒して、立ち上がり、また転倒している。

この都市には兵士、役人、学生がたくさんいる。かつて、彼らはポーランドのリーダーだった。昔は、学生たちの生活は厳しかった。戦後間もない時代には、ひどい服装をしていたそうだ。多くは貧しい農民の息子たちで、土地の人たちと非常に親密に暮らしていた。ひとつのベッドに二人で寝たこともよくあった。その後、それは変化していった。現在では、裕福な学生がたくさんいる。彼らはしばしば粋な振舞いをし、人気者になっている。この夜、中央市場広場をぶらついていると、この国の若い知識人たちの集会に出くわす。仮装行列が行なわれているのだ。先頭は楽団で、おかしな動物、未来派風に描かれた寓意画が続く。シュプレヒコールが起こる。聞いてみると、彼らは経済的援助を要求しているのだ。この仮装行列で、全ポーランド大学人週間の幕が切って落とされる。ひとつの階層が援助を要求する。これが現代だ。郵便配達人も洗濯婦も同じかもしれない。だが、これらの人たちがもつと深刻だろう。若い知識人階層。なぜ、この階層はこんなに大騒ぎするのだろうか。他の階層の方がずっと大変なのに。

この都市の大学と精神的な生活について、話を聞く。私は、半ば考え込みながらも、その話に聞き入る。ポーランドのなかで、ワルシャワはあまりにも肥大してしまった。ワルシャワは地方から汲み尽くして、クラクフは空っぽになってしまった。「こんなことしていたら、ワルシャワの経済は立ち行かなくなるぞ」とのしる人もいる。この都市は不幸な時代にはポーランドの砦だった。ピウスツキがペテルスブルクから逃走した時、オーストリア領ガ

リツィアに本拠をかまえて、オーストリア参謀本部の支援のもとに、射撃協会や幹部軍を結成した。労働者や社会主義を信奉する青年たちが彼を支持した。戦争が始まると、ポーランド義勇軍として、彼らは国境を越えて行軍した。装備はお粗末だった。「ポーランド最高国民委員会」がクラクフに創設され、オーストリアの法学教授ラディスラフ・フォン・ヤボルスキ閣下が議長を務めた。彼はフアイヒンガーの「かのうにの哲学」の信奉者だった。

この都市の歴史はしたたかだ。大学はすでに一四〇〇年には創立され、四つの学部を持つ。信仰心に篤く、ロシアの弾圧と戦い、キリスト教信仰の防壁だった。女王ヤドヴィガはこの大学のために自らの高価な装身具をなげうった。その後、フス派信仰の波がこの地へも押し寄せた。自由なポーランドに、改革派難民が群れをなして出現した。ここにはポーランド・アウリス派、再洗礼派がいたし、ソツツイーニやガリバルディーといったイタリアの自由思想家たちが避難所を見出した。どこでもそうだが、後になってから反動が起きた。それでも、ポーランドの王たちは寛容であり続けた。「異端信仰にとめどはない。最後にあるのは無神論以外の何ものでもない」、と事態を憂慮したエルムランドの司教ホシウスは戒めている。イエズス会が地歩を固めた。古い信仰を墨守する農民たち、下級聖職者たち、のん気で鈍感な民衆たちが、改革派に対して優位を保った。

古めかしくて市民的なクラクフ、ユダヤ人地区カジミエシュの後には、郊外のポドグジェを、そしてプロレタリアート、鉄工業、化学工業を見てみたい。グロツカ通り、王城、ホテル・ロイヤルをあとにし、カジミエシュ地区を抜けて行く。店が連なり、商店の階上にも店が入っている。「猿草」、「五色鸚」、「捕鳥」、「金欄」と書いた商店の看板がある。織物を荷下ろししている。界限を赤毛のユダヤ人女性がたくさん歩いている。ここの若者たちはなんと身なりをかまわないのだろう。髯を剃ってはならないのだ。黒いうぶ髯が、頬から首にかけて濃く生えてい

る。華奢な体つきの少年たちが、黒い長靴をはいて、颯爽と歩いてゆく。髪はまっすぐに刈り、こめかみの巻き毛を長く後ろへなびかせている。商店はいよいよ貧相になってくる。建物がすっかり荒れてしまっている。ここはクラクフ通りだ。カージミール王の記念銘板のある古い建物のそばを通り過ぎる。小学校だ。左手の市場広場では、農家の荷車が藁を撒き散らしている。みすばらしい屋台で、果物や野菜を売っている。小さな脇道を通り抜ける。ひどい身なりのユダヤ人たちにまじって、都市や田舎の無産者たちがうろついたり、荷物を運んでいる。ぼろぼろのひどい外套。だらしのない身なりをした女性たち。壁ぎわの惨めな物乞いたち。血色の悪い子供たち。狭いヨゼフ通りには人が大勢いる。農民や労働者たちは、重い袋を背負って息を切らしている。なんとまあ、小さなポーランド人の浮浪児がいることか。五つか、六つの女の子だ。ぼろぼろの大きすぎる靴をはいて、用心して引きずって歩いている。脚は膝から下がむきだしだ。ぼろのずだ袋を服にして、肩とブロンドの頭に、破れた汚らしい布をかけている。通りはどこもものすごく不潔だ。舗道にはごみや汚物が堆積し、悪臭を発している。食肉市場と魚市場を通り過ぎ、さらにガチョウ市場を過ぎてゆく。馬車から降りる農夫たちの間を、奇妙にもフェルトのスリッパをはいたユダヤ人の老人が行く。黒い、ゆったりした外套にベルトをしめ、礼拝用肩衣を緑のビロードの小袋に入れて、脇に抱えている。

これがヴィスワ河、滔々たる大河ヴィスワの流れだ。岸边が護岸壁でしっかり補強されている。恐れられているのだ。板状の氷が川面を流れている。なんと、氷だ。氷が張ったのだ。ドイツを離れて、もうそんなに長くなるのだ。ワルシャワでは、まだ外套をホテルの部屋において出た。ヴィルノ、レムベルクと経めぐってきた。これから、ポドグジェへ行く。都市から都市へ。何という旅路だろう。

橋を渡ると、太った子犬がショーウィンドーの中に座っていて、皿のものを食べている。建物はすべて二階建て

か三階建てで、老朽化している。破れたポスターが壁にはつてある。政党のアピールだろう。彼らは呼びかけ、熱くさせる。人間は熱くされるのがうれしいのだ。ポスターには公約と達成目標が書かれているのだろう。それから、選挙が終わってみると、——窓ガラスは破れたままで、仕事は朝から晩まで変わらず、それまで同様に呻吟し、これからも呻吟し続けるのだろう。——眼前に広がる方形の広場には、パン菓子、がらくた、野菜の屋台や売り台が雑然と並んでいる。広場の左右両側に荷馬車が入ってゆく。私は、広場の奥にある、マリア教会に似た塔と頂冠をもった、赤い大きな教会の階段を上がろうとする。だが、階段の上には、ひどい格好をした物乞いたちがいる。ぼろ服と古ズボンの切れ端で不格好に身を包み、寒中、女たちがそこに座わっているのだ。着古したスカートが肩の上に垂れて揺れている。そうして、彼女たちは身動きもせずじっと座って、震えている。私は——教会へ——入りたくない。

人々の行き交う郊外の長い通りを歩いてゆく。修道女が二人、黒い帽子の少女の一群を率いてゆく。田舎の人たちが利用する倉庫のような店、小さな建物、肉市場。建物の後ろの壁のかなたには、緑なす丘陵が隆起している。工場の正面。そして、ひどい建物の並ぶ泥だらけのわき道を通って、ヴィスワ河へ戻る。たくさんの犬があたりをじゃれまわっては、ごみ屑を嗅いでいる。地下室から大きな罵り声が聞こえる。ふたたび、石の護岸壁の上に立つ。左手にある巨大な煙突が、重い煙をもくもくと吐き出している。

足下には、鉄灰色の、ちらちら光る流れ。

この都市の政治的外観。

——古くからの保守的で高尚な新聞に「ツァイト」紙がある。これは親オーストリアだったが、現在は法治国家

の立場を代表している。それから、社会民主主義的な「前進」紙、キリスト教国民主義的な「民衆の声」紙、ユダヤ民族主義的な「新日刊紙」がある。この都市では、国会選挙において、キリスト教国民連合、いわゆる八党が二議席、社会主義者が一議席、ユダヤ人が一議席を獲得した。

疾病保険組合の治療室へ行く。州疾病保険組合の新しいきれいな治療室だ。すると、学生たちが外科の臨床講義に向かっているの、私も一緒に行く。急勾配の階段教室。大きな丸窓。下のほうで、白いガウンをはおった白髪まじりの教授が、白い台を前に、講義をしている。髭をきれいに切りそろえている。でかい鼠径ヘルニアをもったひとりの男がその台の上に横たわっている。時おり、教授はヘルニアに触れながら、説明している。右肩から革紐を垂らして、黄色いベルトを締めた軍服姿の若者が、講義の間中、教授の前に立って聴いている。下の壁には、ヘルニア、手術での切断経過、縫合の写真が貼られている。上の方では、若い学生たちも年長の学生たちも、外套を背もたれに掛けている。講義は満員で、一番上では、寒いなか、学生たちが取り囲むようにして立っている。女子学生たちの赤と淡紫色のブラウスは、男子学生たちの褐色や黒い服の中にあって気持ちよく映えている。長い髪をオールバックにした、若い元気な男子学生たちが、退屈顔で、背をもたせかけている。口に手をあてて、二人が雑談している。大胆なショートカットに黒い瞳の魅力的な顔をした娘たちが、ベンチの上で半ば横になり、顎を手で支えて、うつらうつらしている。教授は間断なく話している。両肘を広げて机についている者たち。気持ちよさそうに身体をそらせて、夢うつつの者たち。最上部で取り巻く学生たちを見やる者たち、机の天板に落書きしている者たち。

下へ降りてゆくと、肢体不自由の若者が入り口に立って、放尿している。ここはお前の来るところじゃあない、眼科へ行け、と人々に罵倒されている。

試験のため猛勉強している学生たちを訪ねる。彼らはその後の医業については、ご時世だから、と悲観的だ。その他にも、ポーランドの修道院や教会を巡ったり、イタリアへ行つて、そのことを本や雑誌に書くという学生たちの話を聞く。我がドイツ、それからパリ、ロンドン、そしてその他の国とも変わらない。

現状を客観的に見て、問題となるのは制度、進歩、より良い職だ。彼ら若年層はその下働きの身だ。時として、彼らはそのことを感じ、また何かを予感している。私はずっと前から、若者たちが革命的ではないことを知っている。彼らはただ乱暴なだけだ。彼らは、自然法則に従つて、人類の幼年期を繰り返しているのだ。我が祖国よ、心配は要りませんよ。

中央郵便局の前で、警官に道を尋ねる。彼は親切に、片言のドイツ語を話しながら、通りを渡つて案内してくれる。「さて、まずここを右に、——それから（捜すようにして）もう一度右へ行つて、もう一度右へ行つて、それから（左手を振り回しながら）左へ、それから（彼の顔は笑みでゆがんでいる。それを私の顔に近づけてくる）それから、もう一度左へ。」（彼はどっと笑い出す。私もそれに続く。）

とある門柱の前に、ぼろ服の、年老いた物乞いを見かける。帽子を膝にはさんで、ブリキの皿から、おしつぶしたジャガイモをすくつて食べている。もう一方の柱には、ぼろを着た、小柄な、青白い顔の女の子が立っている。彼の娘で、彼に皿を持ってきたのだ。褐色の大きな眼で彼をじっと眺めている。落ちくぼんだ、大きな眼をしている。眼を凝らして、食べている父親の動きを逐一追っている。

ユダヤ人街を案内してくれた人が話していた一八歳の少女の死体解剖から、重傷を負っていたこと、性的暴行が行われたこと、前日まで生存していたことが明らかになった。彼女は拉致され、暴行され、殺害されて、河に投げ

込まれたのだ。

ある医者の一六歳の娘が行方不明になり、四日間、見つからなかった。彼女は強姦され、路上で発見されたが、意識障害をおこし、錯乱していた。

美術館で見た嫌な顔の女。肉の塊。獣のような脚の動き。人間の皮をかぶった馬。女たちの執拗な顔。今にも咬みつきそうな獣。猛り狂う獣。足元のおぼつかない獣。苦痛で叫び声をあげる獣。

——日曜日の朝、一〇時のこと。この上なく明るい陽光の中を人々が散歩している。そこへ、教会の脇から中央市場広場を越えて、深紅の旗がやってくる。その尖端は広場の上空高く突き出ている。男たちの鉢巻きには赤い文字が書かれている。女性たち、子供たちも隊列に加わっている。四、五〇〇人の一団は、市民的に、ごく穏やかに、広場を渡り、公園のほうへ向かい、それから、見えなくなった。太陽は白く輝き、男女たちが散歩をしている。私はしばらくの間じっとしていたが、それから、太陽を逃れ、彼らを通っていった脇道を探す。ドゥナエフスキ通り沿いの公園をゆく。彼らは大挙して、ドゥナエフスキ通り沿いの労働組合の建物のところに結集している。外は寒い。各工場全従業員が赤い旗を持っている。巨大な花輪、ポスターには「犠牲者たちに」、「戦没者たちに」とある。楽隊が行進してくる。青い帽子の鉄道員たち。赤いカーネーションを持った女子労働者たち。組合はのぼりを立てている。一年前、この市でゼネストがあった。インフレが起きて、下級の鉄道従業員たちは賃金引上げ要求を出した。拒否された後、彼らはストを行った。政府は工場に軍隊を派遣し、厳戒令を布告した。これに対して、労働者たちの同情ストが行われた。政府はこれを力で抑え込もうとした。戦いが行われた。労働者たちは労働組合会館に立てこもった。軍と警察は出入り口を封鎖した。労働者は武器を入手し、先発隊として出動した騎兵隊に発砲した。双方に多数の死傷者が出た。正午に停戦、その後、事件の調停が行われた。政府の取った厳しい措置は、市

民たちの間でも賛同を得ることはできなかった。労働者たちは非暴力的だったにもかかわらず、彼らをロシア的に扱おうとした、とみなされたのだ。この事件で、六〇人の労働者が陪審裁判にかけられ、無罪を言い渡された。死んだ労働者の葬儀には、一万人の人々が参列したが、司祭の姿はなかった。政府と聖職者たちは、射殺された兵士の葬儀に加わっただけだった。一月六日のことだった。その日、私はマリア教会の中央祭壇のところに、花でおわれ、黄色い幅広のリボンがかかった装飾架台に取り囲まれた石棺を見た。その午後、暮れ初める頃、槍騎兵中隊が中央市場広場の方からやってきた。鉄砲を背中に斜めに背負い、右手に三角旗のついた槍を持った槍騎兵が、四人ずつ並んで、高い鉄馬に乗っていた。この光景は地響きとともに現出した。これに対して、もう一方の者たちは、今、何千人にもなって、このドウナエフスキ通りを行進し、墓地へ向かっている。その風になびく赤い旗、旗。

赤旗！ 数ある旗の中で、最も毅然とした旗。私はこの旗がよく理解できる。してみると、私はこのマリア教会と義人の都市で、道を踏み迷っていなかったのだ。血のように赤い旗。機械に縛られ、抑圧された人々。そして、世界の秩序を硬化させ、幸福感に冷や水を浴びせるように見える、体制派の人々。

硬直した世界、その上の血にまみれた旗、旗、旗。

夕方の駅の雑踏。ここには私は何の用もないのだが、既にもう二度、やって来た。そして今回、ふと、その時が来たことを感じる。人が通路にあふれ、三等の待合室へ押しかけている。保安警察官たちが通路を巡回している。着剣した一人の警察官が、褐色の服を着た囚人を護送している。待合室に入ると、囚人は、警察官の若いはつらつとした顔を見て笑っている。囚人は凍えてでもいるかのように、縛られた手を胸の上で合わせている。そして、混

雑した待合室のビュッフェで、直ぐに若い女性に声をかける。二人一緒に笑っている。彼女は彼のためにプチパンをテーブルにおいてやる。囚人は陽気に周囲の者を見つめながら、壁側のベンチに座わり、隅っこにへばりつく。警察官が彼のそばに座る。テーブルの周りに人が集まって、囚人と雑談をする。一人の男が彼にタバコを差し出すと、縛められた男は、合わせた手を妙に注意深く伸ばして、鎖が見えないようにしている。男が火をつけてやる。警察官がソーセージを取りに行く。

そう若くもない陰気な男が、若い女と、しっかり防寒着にくるまった幼く可愛い二人の女の子を連れて、ドアから入ってくる。ちらりとベンチに眼を走らせる。額の皺に深い悲しみをたたえたその男は、荷物の上に腰を下ろす。並んで女が座る。彼女は子供を一人膝の上にのせている。もう一人の子は、指を口にくわえて、タバコの煙がたちこめる部屋を見ている。

待合室の中央部や柱の周りには、ふっくらした健康そうな顔の男たち、労働者たちや、スカーフやショールをまとった女や娘たちが大勢いる。彼女らの多くは、とても若くて、美しく輝いている。若い女子工員が二人でひそひそ話をしている。そして、その後からやって来た若い娘に飛びつき、手を取って、キャッキヤと叫んで、笑い転げている。何かあったのだ。後から来た娘も一緒にはしゃいでいる。一七歳から一八歳の若い女性労働者たちが円陣を組んでいる。その後ろで、帽子をかぶった、のつぽの若者たちがにやにや笑いながら、女の子たちに悪戯をする。と、彼女たちがそれに応えている。女の子たちと若者たちは背中をぶつけあっている。とうとう二人の女の子が、男の子のグループの周りをすばやく回るようにして、プラットホームの方へ向かう。その時、若者の一人が続けざまに、無遠慮に、彼女たちの胸を触っている。最初の女の子は身を引くが、もう一人の方は笑いながら、じっとして、されるがままになっている。別の若者は、彼女たちが続いて出てゆく時、スカーフの上から彼女たちの髪をつ

かみ、一瞬間彼女たちを引き留めている。どちらの娘も顔色を変えず、頭を振ることもなく、瞬時、動きを止め、それから、先を急いでゆく。

原 注

- (1) 一台の馬車を引いて…… この一文は写字生に見落とされていたが、原稿をもとに編者が加えた。
- (2) シャブオットの祭り 時期的には、聖霊降臨祭にあたる。
- (3) 「ラジエルの書」 さまざまな文書からなる古いカバラの書物。天使ラジエルの名がつけられている。
- (4) 「創造の書」 六世紀の書物で、ユダヤ神秘主義を初めて体系的に叙述したもの。
- (5) 別の この語句は写字生に見落とされていたが、原稿をもとに編者が加えた。
- (6) だった この語句は原稿をもとに編者が加えた。
- (7) グルンヴァルト 一四一〇年のタンネンベルクの戦いのポーランドにおける呼称であるグルンヴァルトの戦いのことで、ドイツ騎士団軍に対するポーランド・リトアニア軍の勝利を意味する。

訳 注

- (一) この教会 聖母マリア教会のこと。十三世紀から十四世紀にかけて建てられた。
- (二) ラッパが鳴り響く 一三世紀、モンゴル軍がクラクフに襲来した時、敵襲を告げるラッパがこの教会の塔から吹き鳴らされたという。この故事を記念して、今でも一時間毎に、ラッパが吹き鳴らされている。
- (三) 古い教会 聖フランシスコ教会。十三世紀に建てられたが、一八五〇年の火災後、再建された。
- (四) ヴィスピヤンスキ スタニスワフ・ヴィスピヤンスキ（一八六九—一九〇七）。クラクフ生まれの、「若きポーランド」を代表する文人。同教会の「父なる神」を題とする西窓はポーランドで最も美しいステンドグラスとされている。
- (五) コシチューシュコ 一七九四年、ポーランド最初の独立運動を指導した国民的英雄（一七四六—一八一七）。
- (六) 聖アンドレアス イエスの一二使徒の一人、アンデレのこと。ペトロの弟。
- (七) 聖カタリーナ アレキサンドリアの伝説的殉教者、一四救難聖人の一人。
- (八) 大胆王ボレスワフ ボレスワフ二世大胆王。（一〇三九—一八一年）

- (九) コペルニクス像 現在、コペルニクス像はコレギウム・マイオス中庭にはなく、大学公園にみられる。
- (一〇) トヴァルドフスキ 一六世紀にクラクフ大学で学んだ歴史上の人物にもとづいた伝説上の人物。知識と魔力を手に入れるため、悪魔に魂を売ったとされる。
- (一一) ヘートヴィヒ ポーランド女王ヤドヴィガ(一二三四—九九)。
- (一二) 冊子本 クラクフの事務官バルタザール・ベームのために作られた冊子本。当時の職人や商人の日常生活を描いた二七の挿絵によって有名。
- (一三) マルチエフスキ ヤツェク・マルチエフスキ(一八五四—一九九)
- (一四) ファイト・シュトース ドイツの彫刻家、銅版画家・画家(一四四七頃—一五三三)。一四七七年から一九年間、クラクフで活動した。彼の手になるマリア教会の木彫の中央祭壇は現在国宝に指定されている。
- (一五) カジミエシュ地区 カジミエシュ(カージミール)大王により、一三三五年にクラクフとは別の町として造られた。一五世紀終わりには、クラクフのユダヤ人をこの街に移して、ゲットーがつくられた。
- (一六) 聖句箱 トーラーからの句が書かれた羊皮紙を納めた黒い箱で、祈る時に、皮の紐で左腕と額に付ける。ティフィリン。
- (一七) サマエル ユダヤの伝説にでてくる悪魔の名。ラビ文学においては大天使ミカエルに敵対する死の天使。
- (一八) 女王ヘドヴィガ ポーランド女王ヤドヴィガ(ヘートヴィヒ)のこと。
- (一九) レモスことラビのモーゼス・イセルレ ユダヤ法典「シュルハン・アルーフ」について、アシュケナジの立場から、補遺「マッパ」を書いたことで有名。(一五三〇—七二)
- (二〇) 過ぎ越し祭 イスラエルの民のエジプト脱出を記念する祭。
- (二一) ラグ・バオメル 過ぎ越し祭からシャブオット祭までの七週間は一種の喪服期であるが、三三日目のラグ・バオメルの日だけは、忌みが解かれる、楽しい日である。
- (二二) リリス 荒野に住む魔女で、子供に害を加えるとされた。
- (二三) エリヤ 紀元前九世紀のイスラエルの預言者。バール信仰と対決した。
- (二四) 二二文字あるヘブライ文字の字母名。数行後に出てくる Vav 及び Zain も同様。
- (二五) ユダヤ教では、金曜日の日没から土曜日の日没までは安息日(シャバット)と呼ばれる。この日には一切の業務・労働を停止して、神の安息にあずかる。
- (二六) トーラーの歓喜祭 ユダヤ教では、トーラーを毎週少しずつ読んでゆき、一年かけて読み終える。この喜びと感謝を表す日。シムハット・トーラー。律法祭とも訳される。
- (二七) 新月の日 ローシュ・ホディシユ。律法では新月を祭日として規定してはいないが、祭日と並ぶ特別な日としている。
- (二八) 男子学校のタルムード・トーラー校 タルムード・トーラー校はトーラー、タルムードやその注釈書、法典を学ぶというユダヤ教における重要な宗教的義務にもとづいた学校。

- (二九) ユダヤ教において「学ぶ」とは、基本的にトーラーを学ぶことを意味する。体を揺らすのは宗教的情熱の表現。
- (三〇) 「賢者ナータン」 ドイツの批評家・劇作家レッツィング(一七二九—一八二)の戯曲。
- (三一) 「コーン伯爵」 パウル・ランゲンシャイトの長編小説を映画化したもので、一九二三年制作のドイツ映画。
- (三二) ファイヒンガー 独自の実用主義的立場から「かのうの哲学(一九一一)」を主張した(一八五二—一九三三)。
- (三三) 大学はすでに ヤゲヴォ大学の創設は一三六四年で、一四〇〇年には、パリ大学を範として、改組・再建された。
- (三四) ソツツィーニ イタリアの思想家。反三位一体論や再洗礼を主張したポーランド兄弟団の指導者。(一五三九—一六〇四)
- (三五) ガリバルデー イタリアの政治家でリソルジメント(イタリア統一)の英雄。(一八〇七—一八二)
- (三六) 司教ホシウス スタニスラウス・ホシウス(一五〇四—一七九)。一五六四年、ポーランドにおいてイエズス会を導入するなどして、カトリック対抗宗教改革の指導者となった。ポーランドがカトリック国であり続けたのは、ホシウスに負うところが大きいとされる。

訳者あとがき

本訳はアルフレート・デーブリーン著「ポーランド旅行」の第七章にあたる「クラクフ」を翻訳したものである。

クラクフは一三二〇年からほぼ三世紀にわたり、ポーランド王国の首都として繁栄した。特に、一三六四年にはコペルニクスが学んだヤゲウォ大学が設立されるなど、当時はオーストリアのウィーン、ボヘミアのプラハとならび、中央ヨーロッパの文化的中心地であった。しかし、一五九六年のワルシャワ遷都後は、その繁栄にもかげりがきざした。十八世紀末のポーランド分割では、クラクフはオーストリア領とされた。現在ではポーランド第三の都市として、機械、金属、化学等の諸工業が盛んな工業都市であり、また、第二次世界大戦の戦禍を免れた古い文化遺産を数多く残す歴史的都市でもある。

近代的な路面電車が走りぬけるかたわらに、由緒ある教会など、古いものが数多く息づくクラクフの市街、近代

と過去が交錯し、進歩と伝統が並存するそのあわいにあって、デーブリーンは自己にとり、また人間にとり真に大切なものについて思いを致す。そこで、彼の心を何よりもとらえたものは、マリア教会のキリスト像から伝わってくる人間キリストの苦痛と苦悩であつた。恐ろしいけれども、その苦悩と苦痛の感情に心を開くことによつて、それは光明となる、と彼は述べている。そのようにして、彼は人々の素朴な信仰、伝統的な昔ながらの生活など、忘れられた古い世界に目を向けてゆく。安息日の食卓で家族に取り囲まれて、王者のように座っている父親の姿に、「この段階にたち戻ることができたなら。私も、他の人も」と述べる件には、彼が見いだした光明を見ることができらるであろうか。それとも、それは見果てぬ夢にすぎないのであるか。

しかし、苦悩を介した彼の遍歴は古いものにばかり向かつてゆくわけではない。それはやがて、新しく出現したもの、「赤旗」に象徴される苦悩する大衆への思いへとつながってゆく。ここにデーブリーンの批判精神の本領を見ることができるよう思う。